

## 読書時間ゼロの大学生たち

若者の本離れが進んでいる、などということは今どき社会常識の一部だが、全国大学生協連の調査結果には驚かされた。大学生の1日の平均読書時間に関する項目で、ゼロと答えた割合が53.1%。調査開始以来、初めて5割を超えたそう（第53回学生生活実態調査）。平均時間は23.6分。

平成16年以来、読書時間ゼロは約10年間、30%台に留まっていたが、ここ数年で急上昇し、昨年実施の調査でついに過半数突破となった。この勢いが続くことを想像すると、出版業界の方々の苦悩はさらに深まりそうだ。

そうした趨勢の中、ある文学賞の候補作を高校生に読ませ、独自に賞を決めさせるというイベントを行っている人がいる。明治大学の伊藤氏貴・准教授で、ある文学賞とは、芥川賞ではなく、直木賞だ。名称は「高校生直木賞」。高校生に読ませるのであれば、長編の多い直木賞候補作より、短編が主体の芥川賞候補作のほうがよいのでは、という意見もありそうだが、伊藤氏は「芥川賞候補作を高校生に読ませると本が嫌いになっちゃう」。

なるほど。言われてみたらそのとおりと、うなずかざるを得ない。

誰が読んでもおもしろい小説を選ぶ直木賞に比べ、芥川賞はいわゆる“純文学”を志向する。いっぼう変わった人が書くいっぼう変わった作品が多く、その傾向はむしろ強まっているように感じる。

そこをはっきり「芥川賞受賞作はつまらない」と言い切るのは、舌鋒鋭い文芸時評で知られる早稲田大学の石原千秋・教授。「夏目漱石も谷崎純一郎も川端康成も、芥川賞はとれなかっただろう」と揶揄する。

人事コンサルタント 本田 有明

## おもしろい芥川賞受賞作

さらに石原氏はこう続ける。「いっそのこと芥川賞と直木賞をドッキングさせて一つにしたらいい。そうすれば、『おもしろい文芸作品』が書かれるようになるかもしれない」（平成29年8月「文芸時評9月号」産経新聞）。

その言葉に呼応するような作品が現れた。今年、第158回芥川賞を受賞し、現在もベストセラーとして版を重ねている『おらおらでひとりいぐも』がそれだ。著者63歳の処女作にして、主人公は74歳の老女。

「あいやあ、おらの頭、このごろ、なんぼがおがしくなってきたんでねべが／どうすっぺえ、この先ひとりで、何如にすべがあ」

開巻いきなり読者も頭をガンとやられる。

おひとりさまの時代を生きる老人が、来し方を振り返りつつ、わが身の孤独と行く末を独り語りする小説。しかも文章の半分は東北弁。それが実に「おもしろい文芸作品」なのだ。瀬戸内寂聴氏、佐藤愛子氏、曾野綾子氏など、年配女性陣が老いの生き方を記したエッセイがよく売れる時代状況ともマッチしているように思われる。

では読者層は一部の芥川賞ファンと高齢女性のみか、といえ、そうでもないようだ。知人の大学生に尋ねたところ、何人かが読んだと答え、ちょっと驚かされた。理由の一つはタイトルにある。宮沢賢治の詩「永訣の朝」からとられていることは周知のとおりだが、この詩は大半の国語教科書に今も採録されている。中学時代に目にした言葉は、若者の記憶にも深く留まることだろう。

ということで、青春小説とは真逆の玄冬小説が快走している。芥川賞ファンの1人として、久しぶりに拍手を送った。